



Subaru

昇男声合唱団

ニュース No.228 '10.02.25

「無言館」シリーズ 1・・・無言館の誕生（その1）

□「無言館」について、昨年からずっと、若園さんから「昇ニュース」あてに、沢山の資料の提供があり、紙面にしなくてはと思いつつ、勉強不足で、のびのびになって申し訳ない思いをしていました。10周年コンサートも迫ってきましたので、もう待たなし、勉強をしつつですが、「無言館シリーズ」を上梓していくことにしました。

□今回は、この本に感銘をうけて、「無言館」が誕生する、そもそものきっかけになった、「祈りの画集」について紹介します。本の「あとがき」に「祈りの画集」が発刊されたいきさつが詳しく述べられていますので、そのまま、転載させてもらうことにします。

.....

「祈りの画集」あとがき （転載）

本書は本文のなかでもしばしば言及されているように、昭和49年に放映されたNHK文化展望「祈りの画集」の番組に端を発しています。

放送後わたしたちは、NHK 教養班の小林徹氏とともに、野見山 暁治、宗左近、安田武の3先生方と話し合いを持ちました。この番組での取材をもっとすすめて戦没画学生たちの作品世界と、彼らの「生と死」を掘りすすめられないか。

東京芸術大学に残された学籍簿や、同窓の方々の記憶、各府県の援護課の記録を辿って戦没画学生とその遺族、遺作を探す作業が始まりました。約1年をかけて、ほぼ30名の東京芸術大学に学び戦没した人々を探し出すことができました。昭和51年8月、大分市の興梧武さんの遺族から取材は始まりました。この企画が新聞でとりあげられたこともあって、その後情報が方々から集まり結局53名についての遺族あるいは遺作を見出すことができました。

（中略）

この本では昭和10年から20年にかけて卒業した人々が中心になっています。「画学生」といっても学窓から直接応召した人々から、学徒出陣で入営した人、卒業後アトリエや勤め先から応召した人たちまで年令にも幅があります。

暑い盛りに始まった取材は年をこして初夏の日射しのつよい今年の5月中旬まで続きました。北は弘前から南は種子島まで取材地点は伸べ70地点をこえました。わたしたちはこの企画の取材を手探りの



状態から始めました。わたしたちと死者の間には戦後のながい時間が横たわっている。死者も、かれらの残した作品も、わたしたちが生きているこの世界とは、すでに無関係ではないのか？しかし、一軒一軒、戦没者の家を訪ね歩いてゆくと、死者たちはむっくりと起きだし、つぶやきや叫びやさまざまの表情でわたしたちに語りかけてきたのです。戦後の32年という日本人（遺族）の辿った日々の重さにも、わたしたちは立ちすくむ思いでした。それらは、筆者たちの（心の）記録のとおりです。

ご遺族の方々は、わたしたち、いわば33年目の突然の闖入者に対して、1日から2日ばかりでもてなしていただきました。わたしたち（取材者と遺族）は、それぞれ死者を囲んで、たのしく、かなしく、重い時間を過ごしたという奇妙な体験を共に持ったのでした。

筆者の先生方は1年間にわたって自分の時間をなげうち、この軽くはない取材執筆をしていただきました。（中略）



それにしても、すべての取材を終えて振り返ってみると、故人となった戦没画家、彫刻家、工芸家たちは、いちようにぞんぶんに若く、快活で、青年のもつ爽やかさで今わたしたちの目の前に立って笑っているような気がします。残された作品も、人を悪しき感傷にさそうことのない悪びれない画風作風とはいえないでしょうか。かれらは生者とはちがい、年をとることのない若さで生きて、作品もまた生きている。この本の発刊にあた

って、そのことがわたしたちを励まし続けているように思います。（後略）

昭和52年（1977年）
日本放送出版会 図書編集部
「祈りの画集」編集担当

□36年前の「NHK」の放映「祈りの画集」の番組に端を発して刊行された「祈りの画集」が、「無言館」誕生のきっかけになり、「無言館」を訪れた TERRA の村嶋由紀子ディレクターが感銘を受けて「無言館」の詩が生まれ、組曲となり、その大阪初演が、発端を意識したわけではないのに、「NHK 大阪ホール」で行われる、歴史をたどると、なにか、因縁深いものを感じませんか。